

陸前高田

起きるかもしれない1%のことに努力を惜しまない

話し手——佐藤一男さん

聞き手——大槻淑子、古賀真知子

編集者——小井手祐子

聞いた日——二〇一二年八月一七日



親父と遊んだことは一回もない

名前は佐藤一男。一九六五年一月一六日生まれ。今年四六歳。本籍地は岩手県陸前高田市米崎町字脇ノ沢六番地。被災するまでの住所です。俺が生まれたときには俺の祖父、祖母、父、母。俺が長男で、学年で二つ下に妹。また学年で五つ下でもう一人妹がいます。ばあさんはおとなしい人だから、ほとんど印象ないんだよな。妹二人とは今思えば仲良かったんだけど、思春期はそれなりにいがみ合いもした。父は漁業。まあ自営業だね。一番イメージに近いのは、ちっちゃい町工場の社長って感じかな。ずっと家にいた。朝が早いし、夜も遅いんだけど、三食メシ食うときは一緒にいたし。俺が生まれたときは牡蠣（カキ）はやってなかったんだな。俺の印象に残ってるのは、海苔（ノリ）養殖とわかめ養殖。あとちよっとだけ海鞘（ホヤ）の養殖に手をだしたり、帆立（ホタテ）養殖に手を出したかな。でも基本はわかめと海苔。あと

若干畑を借りてビニールハウスを何年かやってた。

親父と遊んだことは一回もない。保育園に迎えにきてくれるのはじいさんだし、ご飯つくってくれたのはばあさんだし、親父とお袋は仕事だった。小さかったから仕事に行ってるっていう感覚はなかった。親父とお袋はいないという感覚しかない。親と遊んだ記憶はないけど、同級生の友だちと浜に行くと、仕事してるところに行けるわけさ。親父が牡蠣の仕事してる脇で、魚釣りしてるつてのがあったしね。遊んではくれないけど、親がちゃんと仕事してるのは見てるし、仕事の合間に話しかけてはくれたな。

小学校、中学校では浮いた方だった

小学校、中学校では浮いた方だったかな。親父の影響かはわかんないけど、変な子であったのは確かだ。いじめる側といじめられる側の両方に立ってたような記憶がある。うちの頃って絶対的にいじめられるやつ

て、そんなにいなかったからな。空気読めない感満載なんで、生徒会長や学年トップクラスの成績を取るやつは、俺を非常に嫌ってたっていうか、嫌がってたっていうか。でも今みたいに陰湿ないじめじゃなかったな。

授業中、先生から嫌がられる質問をする生徒だった

中学校の頃なんかは、社会科は大っ嫌いになって。一番最初は「何の役に立つんですか」から始まった。理科とか数学って、社会に出ても役に立つってイメージできるわけさ。歴史って雑学として覚えててもいいけど、授業でわざわざやるほどのものかっていう。それをつい先生に言ってしまった、何か納得させられない言葉で怒られた。で、その先生も社会科もすこいよんなって、ぜってい誰が勉強してやるかっていう。好きな科目は理系。数学の授業中、数学の教科書は開いてるんだけど、先生の教えてる所じゃない所を開いている生徒。高校一年の二学期の中頃に、数学の教科書を自分で完了させた。質

問の内容がやっぱ先生から嫌がられる。「この数学の公式は何の役に立つんですか」っていう質問をする子だった。まあ数学が好きっていうより、国語が嫌いだったから数学にのめり込んだ。数学は答えが間違っていれば解き方が間違ってるじゃん。国語は自分はどう考えてますって言うてるのに、先生に違うって言われる。でも何回考えても、これはこうしか思いませんっていう。まあ先生にもよるけどね。やっぱどうい先生に教えられたかによると思う。

中学生の同級生が見る俺と、高校の同級生が見る俺は別人

高校入ったタイミングで性格、キャラは変わった。積極的にものを言うようにはなったんだけど、中学校はほんとに多分おとなしめで、決まったら「はい、従います」みたいな。もう何にも発言しなかったな。中学校の自分に満足しなかったっていうのがあって、もっと言いたいて思ってた。で、高校に入ったときに偶然クラスに中学

校の同級生が一人しか居なかったのさ。そいつもおとなしいやつで、周りに俺の知ってるやつ、俺を否定するやつが誰もいないって思って、「あつ、なんかいいタイミングだな」っていう。チャンスって思ったんだけど、結局、生徒会長とかもちろんなったことないし、文化祭とかでもあれやろとかやったことない。だから、そういうムードに自分自身が慣れてなくて、思いつき的外れのことを言つて、高校に入るとすぐに変キャラになつてた。多分同級生から見ても、中学校の頃、俺がおとなしくしてたつもりでも多分変キャラには入ってたんだよ。だつて中学校の頃から生徒会長とか学級委員長にはもうずっとにらまれてたから。そんなに発言してないのに、俺はにらまれてた。にらまれてるってことは自分で気づいてないだけで何かあったんだよ。なんか変なオーラがでてたんじゃないの。

とりあえずだまつてっかなと思つたんだけど、高校に入つた瞬間に、そのクラスに俺をいじめてくれる人がいなくなつたから、はじけちゃつたんだな。もちろん他の学

校で、いじめ型の人が中学校頃の俺をみれば、黙つてろつていうタイプのやつはいろいろいたんだらうけど、その雰囲気を出さずにキャラ変してしまつたから、そいつらにとつては俺は変なキャラの目立ちたがり屋のおバカなわけさ。中学校の同級生が見る俺と高校の同級生が見る俺は、ほぼ別人なわけさ。

同じ中学校のやつらとわりいことやつてた

友だちは少ないんじゃないかな。浅い付き合いの友だちは多かつたけど、一緒に飲んで騒いでバカやつてつてなると同じ高校の中に二、三人じゃねえかな。どつちかつていうと同じ中学校の別の高校に行つたのと、わりいことやつてたから。俺らの頃のわりいことつてえのは、せいぜいタバコ吸つたり、酒飲んだり程度。友だちから「釣りしてるから出てこい」って電話あつて釣りしに行つたら竿なくて、タバコがあつた。で、いたずらに吸つてみて、その時むせてれば吸つてなかつたんだらうけど、そ

のままむせなかつた。そのときは空吹かしだったんだろうけど。

特に頭がいいわけじゃなかった

俺だって偏差値五五、六そこそこ。特に頭いいわけじゃない。高校の入試ん時、合格者二二五人中、一七〇番くらいだったのよ。で、特進クラスつつうのがあって、それは高校入試のときに上位四五人が入れられて、それ以外はバラバラ。入試では下から数えた方が早いから、俺はもちろん特進クラスじゃないわけよ。入学して、三日目だか四日目に全国模試みたいなのがあってね、そのときにもぼーんと成績が跳ね上がっちゃって。県で一番だったかな。数学は県で二位だった。ただし、英語は下から数えた方が早い。大学入試は全部四択か五択で書くのね。そのときに高校の先生から言われたのは、「お前、頼むから考えずに全部三書いてこい」って言うくらい英語はひどかった。だからわかんないのは全部三書いてきた。で、

大学から合格通知がきて、英語の先生に挨拶しに行つて最初に言われたのは、「お前が受かるとは思わなかつた」だった。

バイトのシフトはほとんど無遅刻無欠席

俺らの頃はとりあえず就職するか進学するか二者択一で選べばなんとかなる時代だった。一八歳で大学行つて山形大学工学部情報工学科の夜間部にいたのさ。アルバイトしながらずっと米沢市にいた。最初は中華料理屋で働いた。三年になって、卒研に入る準備で中華料理屋やめて、一応夜の方のバイトつてことでポウリング場にアルバイトに行つて、週末だけレストラン、ウェイターとして入つた。バイトのシフトはほとんど無遅刻無欠席じゃねえかな。

失敗も成功も糧になつてと思うよ

生活は下宿で、食うには一切困ったことはなかった。けど保証人になって失敗したことはある。サラ金が世の中に出始まった頃なのさ。金利も高くて、同級生がパソコン買うっての保証人になったら、学生だから銀行が金貸してくれなくて、えれえ金利が高くなったわけさ。で、友だちが払いきれなくて、ちよつと大変なことになった。失敗も成功も糧にはなってると思うよ。失敗して損したって思ってるよりは、失敗したことを経験に変えて、もう次の失敗は絶対繰り返さない。人にも繰り返させないと思ってる。

「単位くれないならやめます」って大学やめちゃったから、  
最終学歴は高卒

卒研は四年生っていうことなんだけど、四年生に入ってから三年生のときに二重聴講したのがばれて単位を剥奪された。今はできないんだけど、二重聴講するのは二年のときに落とした水曜の三時間目の単位と三年の三時

間目の単位の両方に履修届を出しといて、三年生のときの水曜の三時間目に二つの授業に出たっていうことになってたってわけさ。それが四年生になってからバレた。だから四年生なってから三年生に取ったときの単位を全部剥奪されたわけさ。すでに四年生の前期に入っちゃってっから前期半年間の分、不正行為ありっていうことで、この単位の履修届出せないじゃん。五年生なってから二年のときの単位、六年目になってから三年のときの単位を取らないと卒業できない。

五年生になってから二年生の単位を取って、三年生のときに本来取らなきゃいけない先生のところに、「すいませんでした」ってご挨拶に行ったら、もう二年経ってるのにも関わらず、「そんなふざけたやつは来なくて良い」って言われて、「じゃあ単位くれないならやめます」ってやめちゃった。だから、最終学歴は高卒です。結局その水曜の一単位を取るために留年してただけだから、ほぼ毎日暇なわけさ。米沢の工業団地の中にミクロンメタルって会社にアルバイトで入って、「大学やめたからそのま

「ま就職させてください」って頼んだ。単位は取れなかったけど、経験が稼げただけでも、まあいつかなって思うんよね。

トラブルも楽しみのうちだった

大学の頃、一番経験稼いだのは、東北地方サマーキャンプっていう実行委員やったこと。東北六県、国立大学が六つあって、そのネットワークから各県にある短大、看護学校、専門学校全部にキャンプが好きな一本釣りで各大学から引っ張りあげてネットワークつくってキャンプやるぞっていう。俺らの先輩からずっとやってたんだけど、四泊五日でピークの時で三〇〇〇人でやった。俺らがやったときは一五〇〇人だったかな。もう続かないみたいだけど、俺らがやったのが二五、二六、二七回辺りまでで三三、三四回までは続いた。一番大変なのは場所取り。「大学生二〇〇〇人集めるからキャンプ場を四泊五日貸して」って言ったって、どこの自治体が

「うん」って言うの。六年かけて一周するから六年も前のことを知っている人は誰もいないから、おんなじとこで良いんだけど場所はできれば変えたいわけさ。ただ二〇〇〇人入れるキャンプ場自体が東北管内にどれくらいあるかっていったら少ないわけよ。五〇〇人くらいまでだったら入れるキャンプ場いっぱいあるんだけど、二〇〇〇人で貸し切れるところがなかなかないんだよね。

俺は中途半端に目立ってたから声をかけられた。好んで実行委員に入ったわけではない。言いだしっぺとか、トップとかは実はほとんどやったことがなくて、誰かがやろうとしているのに声をかけられる。俺は結果的に毎回置かれる共通の場所があつて、サッカーでいうとリベロ、きっちりお前はこれしてろっていう役割のところには置かれないのさ。実行委員長の脇にいて、とりあえず座ってて。次にどんなトラブルが起きるのか考えて、事前は何をしとけばそのトラブルが済むか考えてて。実行委員長より高いところにいる、ゼーンぶ見てて動きながら、ここ動き悪いとかさそういうのが見えるところに



いた。その辺で、周りのことをよく見るってことを学んだんだと思う。トラブルは人が二、三〇〇〇集まって起きないわけがない。それも楽しみのうちだった。

誰でもトラブルが起きるとこは感じるのさ。で、どうしてもトラブルが起きそうなところを見ると、目をそらす、耳を塞ぐ、背を向ける。そういうふうに育てられている人が実は多いと思う。誰でもどうやってたらそれを早く完治して、早く対処して傷がちっええうちになんとかするか。傷おっきくなつてからじゃ大変だもん。でも今の親は、実際はみんなそれやってんだよ。自分の子どもには、そっち行ったら転ぶから行くな。実はその親は転んだ経験があるから言うんであって。でも悪いことにその子どもは、転んで痛いという経験をせずに育っちゃうから次の子どもを育てるときにどう育てたらいいかわかない。だんだんそういう世代が親になりだしてきてる。そういう時代が来ちゃったんだな。

二七歳で地元に戻ってきて遊び回ってた

家業を継ごうと思ったのは、サラリーマンができなかったから。親が子どもの頃から自分で方針決めて、失敗しても自分のせい、成功した分は自分のものって生活してたのずっと見てた。やっぱ仕事ってのは利益出すってのと、品質を高くするってバランスでもってるって思うのね。自分がこうしたいって二〇代の平社員にはそんなこと決められねえわけだ。だからそれにちよつと耐えられなくて、やっぱちっやくても社長だなんて。でも二七から三〇まではほとんど、ほんとに忙しい時しか家にないで遊び回ってた。責任持って仕事するようになったの三二、三くらいからかな。それまでは親父、お袋が元気だったから俺が仕事しなくてもなんとかなったのが一つ。あとは青年団やったり、太鼓フェスティバルやったり、消防やったり。

火事場に行くとは自分の背中を任せるわけさ

消防団に入ったのは帰ってきてからすぐ。試験とか何も無いんだけど、一応米崎分団第一部に人を入れる際は、最低でも班長以上の全員の承諾が必要なわけよ。火事場っていうパニックになる所に行つて、危険な道具を預けたり、下手すると自分の背中を任せるわけさ。その人に任すつて、その人と一緒に火事場で行動できるかどうかを考えなきゃならないわけさ。「あいつと一緒に火事場に行きたくない」っていう人間を入れるわけにはいかないからね。消防団の活動はことがあつた時ね、まず火事でしょ、それから水害、津波、あと行方不明者か。こういうときに出るんだけど、水防訓練とか、火災防御訓練とか、あとは津波訓練とか、行方不明以外はまず訓練がある。

「俺はこういう人間です」って雰囲気を出して、組みたいと思つてくれた人と組んでいきたい

手を抜くとか、できることをやらないっていうのは、絶対自分の持つてる雰囲気に出るって信じてるから。そういう人って会えばなんとなくわかる。一緒に仕事してみると、ああやっぱりっていう経験がものすごく多くて。逆に考えれば自分が手を抜くことをしていれば、わかる人には絶対わかるんだと思うから、手も抜きたくない。で、言われたことをきちつとやってれば仕事が回る職場もあるわけだ。逆に余計なことをするなつて言われる職場も当然ある。けど、そういう職場には俺は絶対向かないし、いられない。だったら「俺はこういうふうな人間です」っていうオーラを出すつていう行動をずっと心がける。自分が持つてる雰囲気を出せるだけ自分のオーラとして出しちゃつて、気づく人には気づいてもらつてその人を選択してもらいたい。

自分がなんとなく人を見れるようになってから、そういう考えになった。人を使うようになって、面接して、なんかこの人いいなとか、あの人ちょっとなどか思う。でも人もいいからとりあえず使ってみる。で、結局ダメだった。大概「この人はな」と思った人は、短期間でやめちゃうわけさ。「この人はいいな」と思った人は長持ちしてるし、それにやっぱ俺が気づくことは、俺の雰囲気、オーラに気づく人は絶対世の中にいる。それに気づかない人は、俺をスルーしても構わない。「俺はこういう人間です」というのを言葉じゃなくて、雰囲気を出して。それで、俺と組みたいって言ってくれる人と組んでいきたいと思ってる。少なくともでかい会社の人事部のある程度の長つてつけられる人はそういう見抜く能力持つてると思うし。目とか立ち振る舞いとか見てれば大体見当つくもん。その辺はばかにできないと思う。

嫁さんとは会った日に結婚するって決めてた

嫁さんに出会ったのは帰ってきてから大分経ってからだから、三四だな。結婚したのはその翌年の三五歳。太鼓フェスティバルっていうのが陸前高田にずっとあって、平成元年から始まった太鼓のお祭り、その実行委員をしばらくやってた。その仲間の家で飲みませんかって声かけられて行ったら、その声をかけてくれた女の人が「私いとこ連れてきたんです」とっていうのが今の嫁さんなんよ。一緒に飲んだときに、ああいいなと思ってる。突っ込んで嫁さんと話したことないけど多分会った日に両方決めてたと思う。お互いに良い歳だったしね。

結婚する前は週に一〇個くらいプログラム入ってた

一番上が長女で、立ち会い出産をして、生まれるところをビデオに撮ってある。子どもが産まれてから家に帰るようになった。もともとこの自治会長する前から消防団でしょ、漁業協同組合の研究部でしょ、あと青年団。青年団やめた後は、青年会議所にいたし、太鼓フェスティ

バルの実行委員も途中でやめたけど、そういうのもやってたし。結婚する前は週に一〇個くらいプログラム入ってたからね。

船の揺れが止まなくて、でけえ地震なんだなと思った

俺は意味を理解する前からじいさんに「地震が起こったら逃げろ」と言われてた。震災が起こったときは海の上で船走らせてた。海の上でも揺れを伝えるので船が変な揺れしておかしいなと思って、前進のレバーを止めるにした。それでも船の揺れが止まなくて、おかしいなと思って。そしたらポケットで緊急地震速報が鳴った。あつ、でけえ地震なんだなと思って周り見渡したら、山鳴りが聞こえて、あつちこつちで土砂崩れが起きてた。ほんでとりあえず土砂崩れの場所を暗記しようと思って、じーつと周りの山みて、土砂崩れの場所一一九番通報しようと思っただけ、いつまで経っても地震がおさまらなくて。じゃあ土砂崩れだけの騒ぎじゃねえなと思って、俺

一人じゃなかったし、従業員乗ってたからすぐ戻って決めて、五分かかないで自分の港に戻った。で、一メートル、二メートルくらいの津波だったら船が流れないような繋ぎ方にして、自分は陸に上がった。従業員が防潮堤の辺りでうろろしてたから、「直接家に向かわないで、一回山が上がって山道回って、家に帰るようにしてください」て解散かけた。自分は自宅戻って、誰かいるかなと思ったら、嫁さんと一歳の長男。どうして良いかわかんないからうろろしてて、逃げるって言ってた余計なこと考えちゃうから、「小学校の長女を迎えて、おじさん家に行け」と目的与えた。「俺は保育園の次女を迎えて、おじさん家に行くから」って。それぞれ別々に行動して、責任を持っておじさん家に集合というふうに指示出して、動き出したな。両方とも無事に長女、次女連れて、おじさん家に戻って、みんなが集まった。

あるはずのない船が防潮堤の上に見えた

その後、ちゃんと家の前の一人暮らしの人が避難したかどうか確認するつてのが、消防団の中にあつた。だけど自分が逃げる、家族を逃がすのが先になつちやつて、自分が確認しなきゃなんないその一人暮らしの人を確認せずに逃げちやつた。だから、やつちやいけないんだけど、その一人暮らしの家確認するためにいったん下に降りた。確認終わつて自分はもう一回自宅に上がつて、二階の自分の部屋に行つたら、ちょうど窓が開いてて、そこからわずかな角度だけど、防潮堤が見えるのさ。その防潮堤の方に目を向けたら、あるはずのない船がね、防潮堤の上に見えたわけさ。海があつて、防潮堤があつて、我が家があるんだから、船が見えるはずがない。それがもう水面上がつつちやつて船が見えた。最初何だかわかんなくて、理解するのに数秒かかったんだけど、あダメなんだと思つて。その辺にあつたもんだけひつつかんですぐ飛び降りて、車に飛び乗つた。

あまりにも理解を超える風景で、悲鳴も涙も何にもでない

防潮堤があつて、何軒か家があつて、我が家があるために家のそばにいた人は、まだ津波が超えて来ていることに全然気づかないわけさ。近所の人に「もう津波来るから逃げる、逃げる」つて言つた。まあそんなうちに親父もいたんだけど、俺に声かけられなかつたら生きていられなかつたかもしれない。で、そのままもう一回おじさんのところに行つて、何とかぎりぎりセーフと。追っかけるように、でかい声であちこちから「津波来たあ、津波来たあ」つて聞こえてきて。どこにいても安心できないということ、高台のおじさん家の背後にある山の上上がつてみたら、山の向こうで津波がすごい勢いで駆け上がつてるのを見た。あまりにも理解を超える風景で、悲鳴も涙も何にもでない。たまに来る余震、でかい地震に「うわあ」つて思うくらいで、地震の現実感はあるんだけど、津波は現実感がないわけさ。

生きてる人間をどうするかが、その場でできる唯一のことだった

一晩目は津波の「ゴゴゴゴ」って流れる音がしてた

もう訊わかんないし、どうしよって。みんなが集まるところに集まって、情報待った方がいってなあって、すぐそばに中学校の体育館があったので、そこに行ったらみんなが集まっていた。俺だけじゃなくて、みんなあまりにも規模がでか過ぎてパニックになってないんだよね。ほんで俺らはおじさん家に避難。まあ避難と言えば、避難。消防団として一度集まるようにはなっていたから、消防団として筋が通っていかない勝手な行動とったわけさ。だから俺がいないという話になんて。俺が流されたんじゃないかっていう扱いになんてんだよ。俺が家族と一緒に中学校の方に行ったら、部長がちよつと泣きながら「はあ良かった」って来てくれて、ちよつと抱き合っちゃった。もう中学校のすぐ下に津波がきてるの見えるし、でもどうしようもないんだよね。生きてる人間をどうするか、その場でできる唯一のことだった。

中学校も学校やってたんで、生徒が全員親が迎えに来てない状況だったの。だから職員も残ってたし、生徒も何人かいた。それで学校の先生がいろいろ手配してくれて、そのうち水止まるだろうから、水出るうちに水確保しようって。で、水道栓開けても出なくて、消火栓開けたら出たの。消火栓で、中学校にあるバケツから鍋から水をかき集めた。あとは近所に声かけて米を譲ってもらって、米炊くのも中学生と動ける消防団とか若い世代集めて、近くの林の木切ったり、折ったりして集めて、それで火を起こした。でも電気釜もないし鍋も少ししかない。あんとき、体育館に三〇〇人以上いたから、とりあえずできた分から、ちっちゃいもんに渡すようにして、おにぎり食わした。でもすぐ「腹減った腹減った」って子どもたちが騒いじゃったんだけど。情けなかったな。保育園児がまず理解できないじゃん。「お父さん寒いよお。お腹

すいたよお。お家帰ろうよお」って言って。だつてねえ保  
 育園児相手にお家流されたんだよって言ったつてさ。い  
 ずれ理解できるかもしれないけど、今起こったばっかり  
 のところで、「家帰ったつてもうないんだよ」って理解で  
 きたらできたで大変なことだし、ぎゅーっと抱っこして  
 「ごめんね。そのうち帰ろうね」って言うことしかできな  
 かった。で、近所から借りてきた毛布を何人かで、おし  
 くらまんじゅう状態で外側だけくるんで、それでまあ一  
 晩目をなんとかそれでやり過ごしたかな。その間にも、  
 夜中に何回かでかくて長い地震があつて、みんなして体  
 育館飛び出してた。すでにまだまだ何回も、そのおっき  
 い津波がいつたりきたりしてるから、ゴゴゴゴゴって流  
 れる音がしてんだよね。流れる音に、さらにでかい揺れ  
 がくつから、また津波がプラスチックでできたら大変な  
 ことになるっていうんで、中学校からもまた抜け出して、  
 中学校のそばにあつた高台にみんなで上がる。でも暗く  
 て、津波がどれくらい引いてるか、どれくらい流れてる  
 かもわかんない。一晩目はそういう夜でした。

二日目くらいまでは、消防団は何もできなかった

体育館も壁が高いところで、ひびが入ってる。全体で  
 歪みが入ってる。校舎にもあちこちひびが入ってる。天井  
 や壁がいつ崩れるかわからない建物に人を置いとくわけ  
 にいかない。なんとか次の場所を探してくださいって  
 うのが中学校校長の判断で。で、あちこち探したら、米崎  
 小学校の体育館が空いてて、ここは避難所指定にもなっ  
 てなかったし、中学校の体育館にあつた絨毯、畳、マット  
 とか全部運んだ。いくら消防団といえども大津波警報が  
 出てる状態で捜索に出ることはできなかったわけさ。二  
 日目くらいまでは、消防団は何もできなかった。だから  
 消防団も避難所生活。消防団の部長もそうだし、俺もそ  
 うだし、家族いる人は避難所にいた。親は別の避難所に  
 いても、嫁さん、子どもがいらないやつは消防屯所に寝泊  
 まりしてたし、いつどんな招集かかるかわかんないから、  
 その間は雑魚寝状態だった。で、部長がこっからはここ

に寝ることっていうだいたいのシステムつくった。

避難所を運営するきっかけは、

部長やみんなが背中を押ししてくれたこと

俺が避難所で運営するにあたってやっぱりきっかけってというのがあって、一番最初に「お前やれ」って言ったのは消防団の部長で、俺が副部長。部長とは付き合いがめっちゃ長いわけさ。平成四年にUターンしてきて、そんなからずっと一緒だから、危険なところにも何度も行ってる。先輩だけど、喧嘩したこともあるし。でも知らない人に神輿の上のにつけられて、この人ちゃんと神輿担いでくれんのかなっていう状態じゃこつちも踏ん張りきかないけど、部長は違う。それに「お前がやれ」って背中押してくれた人が何人かいるわけさ。もともと黙ってられるタチじゃないし、何かあればこうした方がいいんじゃないのって言っちゃう。よく売り言葉に買い言葉で「いやあんだの言ったこと違うんじゃないの」、「じゃあお

前やれよ」ってというのが大嫌いで、「じゃあやるよ」っていう氣質が根本にあった。ただ、避難所の中に入った段階で俺より性格も能力も経験も上の人が何人もいた。何か嫌らしい言い方なだけけど、違うと思ってもこの人が言ったのはとりあえず従うっていう人がいるわけさ。この人に従ってれば、俺がこの辺を目標に行きたいって言ったときに、この人だったらぜっていこれよりさらに上にたどり着ける、みんなを引っ張ってける人がいる。それを今までの中で経験してて、俺が右の方に行きたくても、他の人が左の方に道を導いた。でも行きつく先は実は俺と一緒にやっていう人が何人かいた。その人が俺と違う方向を行ったら、とりあえず黙って従う。そういう人が何人かいたんだけど、その何人かがやはりやらなければいけないことがあると。消防で捜索に行くとか、家族が見つけられないから、俺は悪いけど家族を探すことを優先するって言う人がいた。その人らが偶然が重なって全員「一男に任せてく」って言ってくれたのが、まず今回のきっかけとしては大きい。



結果に満足できる人にお前がやられて言われたから、  
自信を持って避難所の運営を進められた

俺と目指す方向が違うけども結果に満足できる人にお前がやられて言われたから、ふんばるって以上に自信を持って進められたし。その人らだって多分過去の俺を見て、一〇〇点じゃなくても七〇点から八〇点くらいの結果出さだろうと踏んでくれたんだろうと思う。それで何かトラブルがあれば手貸すだろうし。でも「俺は常時いることはできないから、一男に任せる」って言ってくれた人が何人かいる。で、避難所をとりあえずまとめるようになった。でもやんなきゃなんないっていう気持ちだった。最初は義務感かな。不思議と「誰かやって」っていう気持ちにはなんなかった。だから消防団じゃなかったら、体育館の運営もやってないし、そこから波及した仮設住宅の自治会長もおそらくやっていないと思う。

寝るスペースと食い物の確保を一番最初にやった

体育館に行って一番最初にやったのは、寝るスペースを確保する。それと食い物を確保する。みんなに呼び掛けて、「この近所で被災してない親戚回って自分たちの分だけじゃない、みんなの分の米とか野菜とか譲れる分だけ譲ってもらってきて」って。あと何人かには「どっかで水確保できないか見ってきて」って、まず水と米だったな。結構どの家でも米は持っていて、小学校に来た初日だけで二、三〇〇キロ持ってたな。どこの家でもモミカ玄米で保管してあるから、食うばかりに米が搗いてある家はそんなないから電気がないのは困ったな。それでもみんな一〇キロ単位では持ってるから、それを寄せ集めて何日か持つなっていうくらいに初日のうちでなっていた。腹を満たすだけだったらなんとかなると。ただどうやって、人数分炊いて、人数分用意するか。でも、しょっぱなから炊飯器で炊いて、九割は譲り合ってくれたな。ま

ずは子どもから先に配っからって、次に年寄りに配っからって言うのに文句言う人はいなかった。面倒くさいって言う人はいたけどな。「他の方が待遇良いから行く」って。どうぞ行ってください、何にもしねえくせに、他の避難所行ってご飯もらって、また戻ってきてこっちの避難所きてご飯もらってっていう人もいたけど。小学校に移って三日目くらいには、もういろんなものが届きだしたよ。

腹が減つてるとイライラして、

ぶつかなくて良いところで、ぶつかる

最初は小学校の調理場を借りようと思ったんだけど、ガス配管が建物の中に通ってるから、どこで割れてるかわかんないわけよ。ガス警報器が電気がなくて作動しないからガス漏れ起こしてるかもしれないし。それに気づかないでいると大変なことになるし、小学校の調理場は恐いのよ。小学校の調理室自体は何一〇〇人分の道具は

揃ってるんだけど、何一〇〇人分を常に作るわけじゃないからガスボンベも少なくて、正直使いもんになんなかった。で、保育園がすぐそこにあって、保育園の施設が一〇〇人分自炊できる設備整えてるからそこを借りた。ガスがなくてもプロパンガス使えるから、煮炊きした。実は保育園の方は建物が古くて、安全設備が正直古いのよ。最新のやつって電気がないと安全装置が働いてガスが通んないようになってる。古いやつだとそれはないし、配管自体も全部むき出しだし、一番柔らかいところは鉄管じゃなくてホースだし。だから保育園のやつの方がむしろ安心して使えた。結構早い段階から温かいもの食ってたな。とにかく腹にもが入ってればイライラしない。腹が減つてるとイライラしてぶつかなくて良いところで、ぶつかる。だからおばちゃんたちには、すごい頑張ってもらった。

二カ月経ってもどうなるかわからないから、  
食い物は貯めなきゃなんなかった

一番困ったのは食い物のバランスだな。保存し過ぎて賞味期限が切れたり、カビ生えちゃうっていうのもあったり、偏ったりするし、飽きちゃう。まあ、あの段階で食い物に飽きたっていう贅沢を言えるのは、多分市内でも想像できないんじゃないかなと思うけど。見たことも構きた。栄養のバランスとか食い飽きの都合で、ちゃんと二日、三日先までの大体のローテーションつくって調理班はやってるから、そこに一つボンツと明日までのとか今日中についていうのがくるとプログラムが狂う。正直今思えば食っちゃえば良かったんだけど、この物資がいつまでもくるとは限らない。特に最初の一〇日間なんか、全部個人が運んでできてくれたもので、公的支援物資なん

か一つもきてないんだから。一カ月も、二カ月も、食い物がくるとは限らない。でも、うちらは一カ月、二カ月経ってもどうなるかわからない。だったら貯められるだけ食い物は貯めなきゃなんなかった。

役員を決めることで、避難所の運営はうまくいった

自衛隊とか行政からの支援がくるのに一日か二日かもしかすると三日はかかるかもしれないから、それまでは地域のコミュニティで、なんとか食いつないで生きてもらわなきゃいけない。その二日間か三日間だけの態勢作りを災害を想定して、各地域でシステム作る練習しててくださいっていう自主防災システムっていうのが、一応紙の上だけであるのよ。部落会の役員っていうのが、十何人いるんだけど、その人はもう会長が統括、副会長が情報班、女性組は衛生班、青年部の方は資材班っていうふうにある程度の自動割り付けがあったんだ。だからそれを何回かやってるから、どういう部署とどういう部署

があればなんかとなるってのが、なんとなく頭にイメージあって、その役割分担を、現場にいる人間で割りつけばなんとかかなると思った。で、適当な人間その辺に引張ってきて、ほいって役割をおつけければなんとかなるってそうでもない。やっぱり向き不向きっていうのがあるし。でもやっぱり三日間見てると、米炊く、もらってきた野菜を調理する、何か必要なものができたときになんとかするっていう話になったときに、率先して動いて何か手伝うっていうのが何人か出てくるわけさ。その率先して動いてくれた人をじーっと受付のところから見てて、この人だったらうまくみんなをまとめられる、先にたつて動いてくれるっていう人を目星つけといて、「お願いありますからちよつと来てください」っていう。小学校に移ってから三日目、四日目の夜かな。相談会をやつて役員を決めて動きだした。結構うまくいったとは思ふ。

避難所の周りは結構物騒だった

俺らも睡眠時間はとつてたけど、寝ようと思つても寝れなかつたっていうのもあるし、結構物騒だった。小学校の体育館にすれば、いろんなものがあると思うから、盗まれたものもあるし。一番恐かったのは車のガソリンが抜かれるっていうの。ブルドーザーから軽油が全部抜かれた。瓦礫の中にドラム缶が流れてるの見つけて、発電機に使うからつって、無理やり積んで持ってきたわけさ。それで発電機やポリタンクにも入れて使つてドラム缶に三分の一くらい残つたのを玄間前に置いたら気がついたら中身が空だった。ガソリンが抜かれるのも困るんだけど、ガソリン抜くために電灯がない状態で盗みにくるから、ライターとかで火つけられるのが怖くて。大体二三時から二四時くらいと二五時くらいに体育館の周りの駐車場の周りを毎晩時間ずらして警備に行つた。で、俺が起きたタイミングでぐるっと回るっていう。被災して、津波の一番端っこに来た車からガソリン抜かれたとか、結構ガソリン泥棒は出たな。

部長のアイデアで子ども部屋をつくった

五日目には子ども部屋つくった。うちもそうだったけど、やっぱり最初はちっちゃい子は夜八時間むったり寝てくれないし、夜泣く。ちっちゃければちっちゃい子ほどそう。そうすると子どもと一緒の生活に慣れていない家庭つてのもあるし。そういう人ら見ると、子ども持つてるお母さんが大変だし、ストレスになっちゃうの。これは俺じゃなくて、部長がアイデア出したんだけど、子どもがいる家族だけを集めた部屋を一つ学校から借りて、ちっちゃい子がいる家族はそちらで暮らしてくださいと。ちっちゃい子いる家庭だと、隣の家庭のちっちゃい子が泣いても、慣れてるからそんなに気にならないわけさ。お互いに面倒見あうし。体育館は体育館で夜泣きする子どもがいなくなったから、気も楽になるし、お母さん同士は仲良くなるしっていう。

何かをやってないと俺が壊れそうだった

ピーク的时候は避難所に三〇〇人いて、通常三〇〇人集めただけでトラブル起こるのに、二四時間一緒に暮らしててトラブルが起きないはずがないんだよ。でも想像してた数の一〇分の一しかトラブルは起きなかった。今思い返してもすごく不思議。確かにいろんな手立ては講じたけど、ありえない状況にみんな追い込まれてるんだから、手立てを講じたからって防げるトラブルばかりじゃないんだ。ストレスなんかものすごいもんだっし。限界の状態は、最初の三日で通り越してた。明日自分がどうなるかわかんない。もとの生活にはぜってい戻れない。いつまで避難所にいなきゃいけないのかもわかんない。食い物はなんとかあったけど、この環境に一〇日もいたらみんな病気になるっていう不安はものすごくあった。なんせ小学校の体育館の避難所の中に小学校の運動用のマットとか中学校の運動用のマットとか下に敷いて、

寝るスペースつくって、数少ない毛布をみんななかぶりあつて寝て、めっちゃ寒かったし。ストーブだって体育館の中、全然効かないからね。夜中に何回も寒くて目が覚めたもんな。よく病気になるなかつたと思うよ、みんな。凍死がでてもおかしくない状態だった。でも避難所に一緒にいた先輩に、「よくやってくれた」って言われてんだけど、何かをやってないと俺が壊れそうだった。空いた時間の方がしんどい。自分が亡くしたものの、これからやんなきゃなんないこと、いなくなつた友だち、知り合いのことを考えちゃう。夜中に友だちを探しに行こうかなとか。親戚が土地持つてるから、お願いしてあそこへ家建てようかなつて。今ちよつと行ってみようかなつて。今考えてもしようがないことを考えちゃうんだよね。まあ、やつつけてるのが精一杯で、頑張つてるつてのとは多分違う。正直望んだことだけじゃなくて、望んでないことも来るもん。家族の存在がでかいよ。同じ能力持つてたとして、一人暮らしで誰も面倒見なくて良いって思つたら、こんなに前には出てない。何も起きなくつても自

分は全然困らないもん。多分、一人だったら何もやつてないかな。でもじれつたくなつて前に出ちゃうかな。それはなつてみないとわかんないけど。

定期的にだけえ声張り上げて釘刺してたから、みんな協力的だった

物資はずつと来てた。途中から公的支援物資と個人支援物資の両方がくるようになって、どんどん物の供給が安定するようになった。ちゃんと数が揃つたらみんなに渡せる分が揃つたら渡しし、今必要なものがあつたらちゃんと渡すから、ちゃんと見えるように並べて取らせない。俺らも取らない。だからこそ喧嘩にもんなかつた。でも定期的にだけえ声張り上げて、釘刺してたから、みんな協力的つちや協力的だった。

俺らは「忘れ去られることが一番怖い」って言ったけど、メディアはどこも取り上げなかった

だんだんと有名になればなるほど、余計なものもくるから、お陰さまで総理大臣きたり、警察庁長官きたり。三カ月くらいくるメディア、新聞、雑誌、テレビ、ラジオは、「今どういう状況ですか」って言って入ってくるのよ。でも総理大臣が入ってくるときは、くっついてくるのが違うんだよ。欲しいコメントがあつて来てんのさ。「総理大臣今頃来てどう思いますか、遅いと思いませんか」って。「今頃来て遅い」そう言わせたいのよ。それで「今頃来て遅い」みたいなコメントを言ってみましたみたいなことを書かれた。俺言っていないし。俺言っていないもん。全部のメディアに言ったもん、「阪神淡路大震災のとき、あんたら何してた。二カ月で報道を全部打ち切ってたぞ」って。「うちらは二カ月経ったって、おそらくこの状況と対して変わらんないんだぞ」って。「報道をきちん

と続けてくれるのであれば、コメントする気になるけど、総理大臣が来て、こうやって報道陣が来てくれて、現状こうですって言えるのは非常にありがたいことだ」って言ったんだけどどこもそれをメディアは取りあげない。俺らは「忘れ去られることが一番怖い」って言ったんだけど、どこも取り上げなかった。

「葬儀する」って聞く時って悔しいっていうか、残念っていうか、あんな虚しい気持ちはない

数え切れないくらい得たものはほんとにある。収入だけじゃなくて、経験もそうだし、子どもときの思い出もそうだし。でもぜっていかけがえのない友だちがいなくなつたつてのは、もう何も変えられない。まあ家族が一番そうなんだろうけど、遺体があがらないつてのがものすごいきついことで、心のどこかでどっかで生きてんじゃないかって、区切りつかないんだよね。実際問題、「家族大丈夫？」って聞けるかって言うとな聞けないのさ誰

にも。自分から言う人もいるし、聞きづてに「あそこのうちは息子が亡くなった」とか、「父さんが亡くなった」とか。親戚はいろんな都合もあって葬儀しなきゃなんない。けど友だちが亡くなったのは、なかなか誰も連絡くれないんだよな。連絡がくるとすれば「あいつ来週葬儀するんだって」とか「あいつの遺体が見つかったんだってさ」っていう半分噂状態でしか聞こえてこない。本来であれば、お通夜の案内とか葬儀の案内が来てしかるべき付き合いしてた人が、知らない間に葬儀済ましてたとか。震災直後なんか葬儀の案内もなかったって、とても対応なんかできないし、家族だってそんな余裕ないし。実際、俺の知り合いが何人亡くなったか、自分でも未だに確定出せてない。

今、一年半経ってさえ、「えっあの天津波で亡くなってたんだよ」とか、「津波で行方不明のままだよ」とか未だに聞かされる。同級生とかだと同級会である程度対応しようと思うから誰と誰が亡くなったっていう連絡がくるけど、元青年団同士とか、飲み屋で知り合った友だち

とか、保育園のPTA会の役員同士とか今、つながりのない人っていうのはその連絡すら来ない。ましてや、その人の家族が亡くなってるなんかどうやって聞きようなんかない。友だちが三月一日に行方不明になったって半年経ってから聞いて、それから一年経って家族が諦めて葬儀するっていうのを聞く時って悔しいっていうか、残念っていうか。あんな虚しい気持ちはない。

どうやっても納得なんかぜっていでできない、  
理解なんか余計できない

もちろん俺も遺体もあがってないのに、認めたくないけど、それ以上に家族って認めたくないはずなんだよね。でも遺体、髪の毛一本もあがってないのにどっかで区切りをつけなきゃいけない。もう一年だから葬儀するとか、そういう決断って、俺が家族の誰か一人亡くなったとしたら、多分一生決断できないと思う。子どもの誰か一人いなくなると、遺体もあがってなかったらぜってい葬儀



なんかやんない。認めたくない、認めない。そういう人っていっぱいいると思うんだ。法律上とか、親族への区切りってことで諦めて葬儀をやったかもしんない。見つからないのに、子どもの葬式なんか、ぜってい親は認められないんだ。そういうのが、何一〇件、何一〇〇件ってあるんだから。

はつきりしない人の生死って、これほどきついものない。それも普通の行方不明じゃないから三日経っても見つからないっていう段階で九九%もう無理なんだろうけど、九九・九九%無理って言われても、認められないんだよね。ましてや、俺の二個下の飲み友だちで消防団で一緒だったやつが、隣町で仕事してて被災して結局出てこない。見つかってもない。でもまさかあいつがっていう。しっかりとってるやつだし、消防にもいて津波の怖さ知ってるやつだし。何人かいるんだよな。ぜっていこの人は、確実に逃げる手立てを講じるはずだっていうのに、いない、見つからないっていう人。ドラマじゃねえけど、どっかで記憶喪失なって生きてんじゃねえかって

いう。そんなドラマみたいな話があるはずじゃないんだけど。どうやっても納得なんかぜっていできない。理解なんか余計できない。

避難所を運営するとき死んだ人から力をもらった

高田だけで二〇〇〇人くらい流されてるのが事実だし。毎日のように避難所に新聞が届いて、知ってる人の名前が死亡欄に挙がってた。けど、新聞に名前載ったからって信じることなんかできないよ。あの新聞に載った人が死んでたっていうのをどれくらい理解してるかって言ったら、疑問だらけで、理解できてないんだと思う。戸籍上削除されただけで、毎日会ってる人間だったら今日会わないとおかしいなって思うんだけど、仕事でもない限り、親戚でもない限り、必ず会わなきゃなんないもんでもないし。月にいっぺんも会わない人もいるんだし。でも大事な人。その人が新聞で、はい死んでますって載ったからって納得なんかできないんだよ。頭ん中の死亡者

のリストになんか入れれないし。数字上では陸前高田は一八〇〇人くらい死んでますって言うてるけど、俺ん中では多分一〇〇人か二〇〇人くらいしか死んでないって納得させようとしている。むしろ震災後に震災とは別の件で亡くなった知り合いの方が葬式とか行ってるし、親族にも挨拶してるし、はつきりと死んだって理解できる。年に一回か二回しか会わなくても、ほんとに大事なときに連絡とか取り合う人ってのは消せないんだよね。アドレス帳にも何人も残ってる。

でもね、その現実を突きつけられる時ってたまーにあるのさ。その人がいるべき場所に俺が行かなきゃなんない時。消防の会議とか青年会議所のOB会とか。いろんなところでいべきところに、必要な人がいない、頼りたい人がいない。風邪引いて休んでるかもしれないんだけど、「死んだ」「行方不明だ」って返事されるのが恐くて、「あの人どうしたの」って聞けないんだよ。でも避難所運営する時って、むしろそういう人らが力になった。「あいつだったらこんな時どうするか」「あの人だったらこんな

時どう言うのかな」って。

自分の能力の限界をはるかに超えたところで運営したと自分でも思う。正直、体育館の運営はうまくいったと思う。運も良かったと思う。でも震災前の俺にそんな能力があったかって言われると絶対ない。そんなに決断力なんか持ってない。目指すものがあるとすれば、環境が変わってしまった。自分の子どもが落ち着いていられる場所を作りたかった。落ち着いてる環境をつくりたかったっていう目標があるんだけど。やりたいっていうのとは違う。できるっていうのはまた別だから。死んだ人からかなり力をもらった。それだけは確か。

俺の教育が甘かったってすごい責任感した

地震津波の知識が叩き込まれてるあいつが、亡くなるはずが絶対になんか思ってたのに、いつまで経ってもいない。それがすごく残念だっていうより、俺の教育が甘かったってすごい責任感して。教えきれなかったとい

う思いが。必要だと思った倍逃げろとか、人より早く逃げろとか、消防団だからって、全員を背中に背負って逃げろっていう必要はどこにもないんだ。消防団っていうのはプロではない、ボランティアだから、自分の命をかけて人の命を助ける必要はないので「逃げろ」と言ってる声をかければ、消防団としての責任は果たしてることになる。

消防団の活動のメインは火事場なので、消防団に入ってた先輩から必ず言われるのは、「火を見たらみんなパニックになる。家が丸ごと燃えてんの見たら全員浮足立つ。でも人を助けようと思う。火を出したやつが悪いと思え。その言葉を一番最初に自分の身体の中で理解してから動かないと、ぜってい後悔する。自分がケガをするか、人にケガをさせるか。だから火を見たら火を出したやつが悪い。頭の中で繰り返しながら動け」っていうふうに叩き込まれた。俺は叩き込まれてきたし、先輩にもそれを伝えてきた。地震があったらこう思え、津波警報が出たらこう思え。三メートルの津波って言われたら波っ

てぶつかり合うものだから、場所によっては六メートルになるかもしれないし。それを覚悟の上で、どこで自分が六メートルの波を受けてもいいように活動しろと言われてきた。それを言ってたつもりんだけど、それを言葉じゃなくて実感として伝えられたのかっていう、すごく後悔が…。

奇跡に出会えると、何かあがってこないと認められない

今年の三月まで家族も認めない。三月一七日の一週間経ったところで葬儀をして俺も区切りをつけたんですけど、やっぱり髪の毛の一本も未だに見つかってない。実感なんかどこにもないですよ。だから認められないし。何千人に一人の確率なんですけど、奇跡が起きてるんですよ。もう自宅から流されてるのを見られてるのに、実は山に打ち上げられて助かったとか。

消防団と一緒に活動しているやつの奥さんが、となりの気仙沼に仕事に行ってて被災して、どう見ても仕事場

は完全に津波が入ってる。被災から一週間近く経っても奥さんが帰ってこない。生存の連絡つつうのは行政無線で何とかなるのに、それすら連絡がない。ここで大津波警報が解除される三日間耐えて、四日目から一週間目までは生存者捜索と一緒に活動しに行った。で、一週間経ったときに「すいません、ちよつと捜索休ませてください。うちの家内から連絡がないんで探しに行つてきます」って気仙沼へ行ったら、気仙沼では大きな火事があつて。その火事があつたところの隣のビルの屋上に避難してて、全身やけどで病院に運ばれて、連絡が取れなかつたんです。生きてたんですよ。もう俺らにとつても奇跡だし。そんなときは全員で、メンバー全員でほんとに泣いた。そういう経験もしましたし。そういうほんとに何百人、何千人の奇跡に出会えると、どうしても遺体があがつてこないと認められないんですよ。もしかしたらつて心に。何も出てきてないので、心に残るんですよ。

この震災のために俺は経験を積んできたのになつて思つてる

一段落してから思つたのは、大学の頃に千何百人集めたキャンプやったり、その後にもこっち戻つてきて、青年団入ったり青年会議所入ったり、太鼓フェスティバルの実行委員会やったり、そんなときの経験は全部活かされてる。逆に考えると、この震災のために俺は経験を積んできたのになつてすら思つた時があつたし、今でも思つてる。イベントやるつてことは、トラブルの経験を重ねるつてことだから、その経験があると、うまくいった経験より失敗した後、なんとかする経験の方が何十倍役に立つのさ。予定通りに行くんだつたら、そんなに楽なことではないし。どんな完璧な予定立てたつて、ぜつてえどこかでトラブルが起きる。トラブルが起きたときに俺はどうするか、どう考えたか、誰にどうしてもらつたか、それを思い出ただけで、まず体育館の避難所でトラブルの起きそうな気配が出ただけですぐに動き出してた。誰

かに、こういう状況になるかもしれないからなんとかしてとか。自分で動いて、そのトラブルの種がちっちゃいうちに消して歩くか。

人の自由を奪う代わりに、  
自分も得するようなことは絶対にしないって決めてた

一番恐かったトラブルは、各個人が勝手に自分の利益になることをやり始めること。そうするとそれに右倣えする人が出てくる。そうすると収拾がつかなくなるから、各個人が動きだす前に「これはするな」「これは許さん」って、毎晩怒鳴って、釘を刺してた。怒鳴られている方がなんで怒鳴られているのか、わかっていなかったっていう。おぼちゃんたちに「なんでこんなに怒られなかったらわかんないのか」って言われたことがある。八割方の人は俺が怒鳴ってる対象ではないんだよ。アクションを起こしそうな人だけつまみだして、怒れば済むかっていうとそうでもないからね。その人がやらなかったら別の

人が絶対同じことをやりだす。それを一個一個つまんで対処してたんじゃ俺は身がもたないし、漏れが発生する。だから何かこういう事態が起きそうになったときは、全員の前で全員に「これするな」って言う。そうすることによってみんなの身動き封じてたのかな。そんな気がする。人の自由を奪う代わりに、自分も得するようなことは絶対にしないって決めてたし、役員にもそうしてくださいって言うてた。「役員特権ってのはありません、その代わり自分の家族が安心してここに居られる状況をみんなで作ってください」っていう話をした。

例えば、充電器は電気通るまで全部出せって。発電機持ってきて、夜だけライトがつけられる状況にしたら、「充電器あるんで携帯充電なくなったから充電させてください」っていう人が一人来たのよ。いつ電話がくるかわかんない。だったら充電しといた方がいいのは確かだし、言うてることは理解できると。そんな時、俺が「終わった俺にも貸して」って言うおうとしたのさ。そこで何かおかしいと。その段階で俺が得しちやだめだよなって。こ

の人が充電器持つてるのわかったら、みんな貸してって  
言いたくなるよねって。ただぜってい人の強弱が発生す  
る。でもそれはもう不公平の始まりだなと。

ああいう状況だとお金持ちも貧乏人もあっちゃいけない  
んだ。優先順位もあっちゃいけない。優先順位がある  
とすれば弱い人、子どもとか老人、病气な人が優先であっ  
て、役員とか口の上手な人が得してたら、ぜっていこん  
などこは崩壊する。今必要なものを持つている人が強い  
立場になったら今の運営は崩壊するって頭の中でシミュ  
レーションして「こっちで管理して、あなたのもちやん  
と充電するからって充電器預けて」って。で、一人とは  
限んねえなっと思って、その日のうちに「いつ電波届く  
かわかりません。携帯みなさんの分、充電したいと思っ  
ますので」って言って、先に充電器を全部出してもらっ  
て、消防団のを優先する。それから順番にあいたところ  
からみなさんのを充電していくからって運営してた。

仮設住宅当選の連絡が来たときは複雑だったな

仮設の建設が始まったのが、四月の頭。四月一七、一八  
日あたりから当選の連絡が携帯に入るようになった。俺  
に当選の連絡がきたのが四月二四日だったかな。一六日  
くらいから当選者がぼつぼつ始めて「うち当選した」  
とか「みんなに言いづらいただけ当選した」っていう。  
俺は「米崎町内」って書いたけど、最後まで連絡来なかつ  
た。米崎町では落ちたんだなって思ってたけど、誰かキャ  
ンセルがあったんじゃないのかな。希望通りの仮設に入  
れた。体育館の避難所で、だいたい数が出揃って当選者  
の連絡が、全然なくなつて、三日くらい経つてからうちに  
連絡が来て。でも連絡が来たときは複雑だったな。家族  
のことを考えれば早く仮設住宅に入りたかった。でもこ  
の体育館の避難所ほっぽり出して俺行つていいのかなっ  
ていう。結構しばらく通いで体育館に来てたな。五月三  
日には鍵もらったんだけど、家電が入ってなくて結局移

れなくて、五月一〇日あたりにみんな移ったのかな。

子どもが遊べる特別な集会所

小学校のグラウンドに仮設住宅が入ることになったんですけど、集会所がない。で、グラウンドに建てた仮設住宅に屁理屈がついて、「目の前に学校っていう立派な施設があるから、学校から一部屋借りろ」と言われてるんですけどって学校長に言ったんですけど、どこの地区も一緒に、中学校か小学校かどっちか必ず津波で校舎をやられてるんです。てことは、中学校に小学校が間借りしてるか、小学校が中学校に間借りしてる状態なんです。だからとてもじゃないけど部屋がない。ましてやこっちが会議しようとするれば、やっぱりスタートが一九時、終了が二一時。学校っていう建物の特性上、一箇所の鍵を開けると全ての部屋に入れる。それはだめだど。グラウンドの一角を借りて建てようと思ったんですけど、仮設で狭くしちまったグラウンドをこれ以上狭くしたくないしって

いう。そこで、体育館の避難所で出会ったいくつかの団体に、そういうわけで建物がほしいと話ぶん投げたら、セーブ・ザ・チルドレンが受けてくれた。セーブ・ザ・チルドレンとしては、子どもを常に入れる状況を作りたいうっていうことで、おもちゃとか、絵本とか、テーブルとかが常設してあるのをイメージしてる。セーブ・ザ・チルドレンが子どもたちのことを言うんだったら、「雨が降っても子どもたちが遊べる場所を提供して」って言うたら建ったんです。

こんなにも物がある集会所、思いつきり特別

こんなにも物がある集会所、もう思いつきり特別です。だから集会所は完璧に近所から独立した建物なんだけど恐い。ちよつとグルつと見渡せば金になりそうな物はあるんで、パソコンとか。それを狙った泥棒つても常に入心配はしてるんです。まあ簡単に入ろうと思えば入れるし、なんかありそうな感じしますもんね。集会所って言っ

たら支援物資がとか何かいろいろね。だからわざと俺の車とか置いて可能な限り人いるんだよってという雰囲気を出してる。

若いときの苦勞は買ってもしろ

ずーっと抱えてた座右の銘っていうか、格言というのがあって。今の世代に言うとすぐ年老り臭く聞こえっけど、ずっと抱えてたのは、「若いときの苦勞は買ってもしろ」っていうのがある。苦勞する、面倒くさいことから逃げないようにはしたいとは思ってた。自分で乗り越えた面倒くささ、大変さっていうのは、次同じものってきたときに前回よりは、ぜってえ簡単に乗り越えられるようになる。それが二回、三回乗り越えさえすれば、他の人が「うわっ、これやだな」って思うようなことが、割と簡単に自分の頭の中で、答えが出せて、すぐにできるようなのかなあと。だから、面倒くさいこと、嫌なことつつうのは、できれば飛び込んでやりたいと思ってる

た。人と人のいざこざつつうのは、正直解き方がわからないし、そういう分野は俺が苦手にしてるけど、面倒くさくてもやり続けてれば解けるもの、答えが見つかるもの、解決してしまうものってあるじゃん。そういうのは積極的にやろうかなとずっと思ってた。多分中学校の頃からかな。高校の頃はすでに確実に思ってた。

なんか面倒くさいこと、嫌なことつつうのは、自分が率先してやった方が、そのときは周りの人がラッキーと思うかもしれないけど、結果的には自分の経験になって、いづれなにかあった時、自分はそれを解決するノウハウっていうか、技術っていうか、それは自分のものにしていくっていう。その言葉を意識してるからかもしれないけど、人生の途中途中でそれを実践してきたんだなと思える人には何人会ってる。

一生自分は未熟で、本気で思い続けないとたどり着けない世界



俺が身近な中で理想としてる人ってのは、藤田東一さん。この地元の人で、今は引退したんだけど、米崎町コミュニティセンターの元事務局長やってた人。大工さんで、途中で病気になって、ちょっと身体が不自由になっちゃったんだけど、実は国宝の日本刀も研ぐ免許を持つてる研ぎ師で、今でもきちっと研ぐことを続けている人。そういう人って、仕事に途中で満足したり、満足したものを作っちゃったと思ったら多分そこまでの技術ってその人には身に付かないんだろうな。一生自分は未熟なんだからって思える、本気で思い続けるくらいじゃないとその世界にたどり着けないんだろうなって、見てて思う。

三〇歳にして俺らは、藤田さんにとって子どもだった

藤田さんは、こっちが手を抜いたり、物を壊したり、規定にそぐわないことをやったり、何をやっても人を怒らないんだよね。例えばコミセンの事務局長だったからコミセンの鍵の管理を当然してるわけさ。その鍵を「お

前ら青年協力隊だから好きに使え」ってポンって預けて、二四時間体制で飲んで食って騒いでつてのをコミセンでしてたわけさ。で、他の団体には畳の上での飲み食いっつうのは規約上ダメですとか、この部屋はアルコール、飲食OKだけど、あそこの部屋は一切だめですっていうのが、青年会はいいよって。二二時になろうが二四時なろうが、外からのクレームがくることだけはするなよって言う程度で、俺らがやった分には怒らない。他の人にあんだけ厳しいのに、俺らが汚したり、壊したりした後処理はやっててくれてたわけさ。それをずーっと見てるうちに「この人に迷惑かけちゃだめだよな」って。俺らのことを信じてるといよりね、育ててるっていう感じだった。今にして思えば三〇歳にして俺らは、あの人間としてこうなりたいなって、

一番最初に出てくんのは藤田東一さん

反省って、誰に言われたから反省するもんじゃなくないと思うんだよ。「やっちゃった」の後に反省って出てくるのさ。怒られたことに対する反省っておそらく何の役にも立たないと思う。自分の人生が変わるとか、次はこうしようとかっていうのにはならない。怒られてする反省っていうのは、怒られないようにしようという反省にしかないわけさ。要は怒られない逃げ道を探す。でも壊しちゃった反省っていうのは、次は壊さないようにしようっていう反省になるじゃん。それをずっと経験させてくれた。「二〇代、三〇代のうちに、周りからバカだつて言われるくらいバカやれ」と言ってくれた人で。でもことあるごとに、次こういうことがやりたいんですけどって打ち合わせにいたり、なんか時間あってちよつと寄ってみましたってお茶飲みに行ったりすると、結構良いこと言ってくれるんだよね。でも世の中から見ると、頑固偏屈。ここにこしてる顔なんて見たことねえな。まあ、いろんな分野で抜き出でて、この人この分野すごいなって思う人はほんとに俺の中ではいっぱいいるけど。人間と

してこうなりたいな、こうありたいな、こういう器持ちたいなって、一番最初に出てくんの藤田東一さん。

もとの生活に戻るリハビリを始めなきゃいけない

俺が体育館からいなくなつて全てのことが回るんだし、そんなに悩む必要もなかったなど。何を心配してたんだろうなど仮設移った後に思った。俺がいらないならいなりに、次の人流の運営方法っていうのは必ず出てくるし、それをさらつとやってくれた人がいるし。でも、仮設は体育館避難所よりはるかに高齢者率が高いから、それはちよつと心配してる。本来俺が心配すべきことではないんだろなという気持ちもあるけど。そろそろ義援金がどうか、支援助資がどうかかっていう時期じゃないんだろうな。本当に収入がなくなつて本当に暮らせない人ってのは、もうきちつと生活保護申請してっていう時期に入ってるわけさ。そういう意味では、元に戻るリハビリを始めたきゃいけない時期にもう入つただろうな。震災

前にうちの部落に支援物資とか炊き出ししてもちろん来たことないわけさ。なんか来てもらってそれに慣れちゃった。でも、いつまでもあるわけじゃないし、もともとあったもんじゃないし。その辺は今残る人が、どう考えるんだろうと思うとちよつと恐いかな。炊き出しも断ろうかなってずつと思ってる。

一八〇人いれば一八〇色あるんだよ

今年の四月にここの仮設で「正直、支援物資ってまだ必要ですか」って総会をやったわけさ。各部屋から一人は来てくださいって、でも実質来たのは五二人かな。「もらえるものは何でももらいましょよ」って欲しがってる人が多い。でも、物資は善意で来てるんだよっていう。善意は善意のもとで受けとらなきゃいけないと思うんだ。「善意を受け取るのにラッキーって思ったら、その善意を受け取る権利はあなたにはないよ」って俺は言いたい。ましてや、もらわなきゃ損するなんて考えて支援物資受け

取ったら、支援する側の気持ちはどうなのっていう。女性用生理用品をもらわなきゃ損するってもらいに来たおじさんとかね。なんだかわかんねえけど、みんなが並んでるから俺も並んだみたい。そういう人に限って、全戸配布の閲覧板回しても、うちには案内来ないとか平気で言うからねえ。まあお年寄りとかはまだ必要だって人が割と多い。最終的には「自治会長に判断を委ねるから、自治会長が必要と認めたものを選別してください」という結論に総会は落ち着いた。ただ総会の前から、もう俺がぎつちり漁業の方に行ってたから、そういう対応もどんどんできなくなってた。総会で「支援団体来たときに、挨拶したり、最後の片付けまで見たり、送り出した、俺一人じゃ、もうとでもじゃないけど無理です」って言った。「もういいんじゃない」って言う人に限って、物ももらわなくても支援団体さんが帰るまで、並んで頭さげて、一緒に見送ってくれるの。でも欲しいって言うてる人に限って、来て配る段取りができるまで出て来ないで、配り始まってから出てきて、見送りもしない。「そういう

人らのために俺はもう動けませんよ」って四月の段階ではつきり言った。それから何人かはちゃんとしてくれるんだけど、そういう人に限って自分のことだと思ってるんだよね。もうそういう人はそういう人と認めるしかないじゃない。別に六〇軒で一八二人いて、全部が全部俺と同じ考え方の人間が誰か一人でもいるかって、俺はいないって断言できるし。十人十色って言葉があるけど、一八〇人いれば一八〇色あるんだよ。ただ想定の外の人がいらないから俺にとってはラッキーで考えてる。犯罪犯してまでとかそこまで考えてる人はいない思ってるから。まあそこまで誰もいかなければ、とりあえず俺は組んでいけるなって。

相手のことを認めようとしな人同士の会話には、  
入っていけない

自分の意見は正しいと思って、人の話を聞かない人っているじゃん、そういうのは面倒くさい。例えば目標が一

つあって、今現状がこうで、そこへの行き先がいくつもあ  
るなって頭の中で考えてるのさ。そんなかで最短距離が  
二本あるかなって。「俺はこっちだと思う」「俺はあっちだ  
と思う」ってお互いに相手の言ってることの弱点だけを  
つつき合う会話をしていると俺は思いつき引く。正解か  
どうかなんてわかんないし、最短距離が一本に見えない  
以上どっちでもいいじゃん、そんなにけんかすることな  
んでないでしょうっていう。その仲裁だけは本当に苦手。  
相手のことを認めようとしな人同士の会話には、とっ  
てもじゃないけど入っていけない。で、それが自分の考え  
はこうだからじゃなくて、あの人嫌いだから、いつも面  
倒くさいこと言うからっていう感じで否定が始まるわけ  
さ。言ってることの穴をつついてるんだけど、実はその人  
をただ単につつきたいと。同じことを別の人が言ったら  
スルーして通すよね。でもこの人が言ったから反対して  
んだよねっていうのが見え見えの時があつて。こっちな  
人も売り言葉に買い言葉で引かないし。そういうところ  
に行く、終わったら呼んでって形でいなくなっちゃう。

ひねくれもんなのか遠回りの努力が好き

誰だって、できることであれば立派な人間になりたいって思うと思うのさ。考え方スマートで、やることスマートでっていう人間になれたらいいなって思うと思うし。じゃあどうすんのって言われると難しいし、どうしたらいいか一朝一夕にできないっていうのは誰しも理解できると思う。努力っていうのはあんま好きではないんだけど、ひねくれもんなのか遠回りの努力が好きで、最短距離を走るのはむしろ俺は嫌な方で。立派な人間になりたいという意識はずっとあるけど、何も知らない立派な人間になりたいとは思わない。まあ程度の問題はあるけど、周りからやめろって言われるようなことも自分でやって、「あ、やっちゃいけないことなんだな」って実感してからやめたい。「やめろ。俺もやったけど、後悔したからやめろ」という言い方をしたい。例えばタバコはこういう害があるからってという言い方は誰でもできる。けど吸ったから

自分は後悔した、だからやめろって言うのは全然説得力が違うじゃん。程度の問題はあっても、いたずらなことをいろいろやってみたい。まあ俺の人生、決してほめられたことはやってきてないよ。

初めて食う人にまずい牡蠣を食わせないで

おいしい牡蠣つくってって言いたい。もちろんここより環境の良いところはあるし。ここより環境が悪くて味出せないところもある。でもやることやってんのかなと思ってみるとそうでもない。そういう人らが結構築地に行って、どこ視察したら良いって言う結構こっちに指名が入って来てるわけさ。で、年間こうやってこうやってこうやって言うのと「うちは無理だなあ」とか「年寄り」は頭堅いからなかなか話進まねえな」という話になる。で、成果は結局ひとつも出せずに帰って行くわけだけ。そういう人らって正直安い牡蠣になるわけさ。一粒五〇〇円、八〇〇円、一〇〇〇円もする牡蠣を誰が食うかつ

ついたら、ほんとに世の中の何パーセントの金持ちしか食えない。でも俺らが初めにその牡蠣を食ってほしいのは、そういう人じゃなくて、初めて牡蠣を食う人に食ってほしい。世の中に安かろう、悪かろうの牡蠣があるために、入口で牡蠣っておいしくないもんだって思われたら牡蠣の消費者がどんどん減ってくわけさ。それつてもすごいマイナス。しかも一番最初に食ったので、牡蠣で食あたり起こしたり、まずいって思ったら、後一生牡蠣食わないんだよ。食わなくても全然困るもんじゃやないからね。酒とかだつたらね付き合いで飲まなきゃいけない時つてあるでしょ。でも牡蠣とかつて選択できるのさ。「私、牡蠣嫌いっすから」って普通に言える食い物なわけよ。そういう人にまずい牡蠣を食わせないでつて。

評価Ⅱ金じゃない

俺らはそれなりに生活できる金額もらってるから、単に高く売らなくたっていいから、利益を出すための個人

直販じゃなくつて、初めて食う人の個人直販。グルメ通の人が食つて「ああ、前食つた牡蠣より落ちるね」つて言われるかもしれないけど、初めて食つた人が牡蠣を嫌いになる牡蠣じゃないと信じてる。うちに来て「牡蠣嫌いだったんですけど、食えるようになりました」とか言う人が何人もいる。「何件か友だちに頼まれて送つて、その親戚が気に入っちゃつて。うちにお歳暮を全部頼みます」つていう人も何人かいて。それから派生して、どんどん広がつて、震災前に三億くらい米崎だけであげたのかな。三億つて金額だけで聞くと大きいんだけど、利益になるとものすごいガタつと下がるじゃん。

米崎の牡蠣の利益率は割と高くて、三〇〇〇万あげれば、家建てて、車買つて、良い生活ができる。明日どこ行こうかな、ドイツニールンド行つてようかなつていう生活ができるんだけど、ぼろ儲けする必要はないと思う。自分の生活を脅かすほど安売りするつもりはもちろんないけど、ほんとに金持ちしか食えない牡蠣をつくりたいとは思わない。評価をしてもらえる分はもちろんう

うれしいけど。評価は金じゃないと思ってるから。そういうのは商売上手な人に任せる。俺はそっちは無理だから。

高田市内の人間でさえ危険な場所って忘れてる人がいる

今せっかくこんだけの人がそろそろ来てるのに、一本松の周りに家くらい建てろよっていう。共同でお土産ショップ出して、陸前高田の物産をズラッと全部並べるっつうのはどうだって。でもこんな危険な場所で商売して、人が集まって良いですよっていう環境をつくって良い場所か。高田市内の人間でさえ危険な場所って忘れてる人いる。一〇〇〇年にいっぺんのがこないだ来たばかりだから、後来ないと思ってる。一八メートルの津波じゃなくたって、今の状態だったら一メートルの津波でも大変なことになるんだよ。

街づくり全体を長い時間で間違っただよ

陸上に被害があつた最後の津波は、陸前高田限定で言う昭和三三年のチリ地震津波じゃねえかな。そのときの高さを基準に東日本大震災で倒されちゃった防潮堤をつくつただよ。それ以後、防潮堤がなくてもそんなに陸に上がるような津波はほとんどきてない。でも、じいさんはあそこの避難所は低いから逃げるなって。あそこの避難所は低いって言っても、どこまで来るか、高い方に想定してればよかつただけど、高い方に想定してないから、利便が良くてみんなにわかりやすく、かつ自分たちの住んでる部落の中に避難所をつくらうとするわけさ。隣の地区にうちの避難所っていう設定はしてないのよ、だから低いとこしかない部落って、低いところにしか避難所をつくれぬい。街づくり全体を長い時間で間違っただよ。

高田はみんなでやられて、みんなでがんばんなきゃって

気仙沼や大船渡の場合、半分やられて、今暮らすための最低限の商店街は残ったのよ。高田って何もないじゃん。高田はみんなやられて、みんなでがんばらなきゃって雰囲気なんだけど、気仙沼、大船渡に至っては買い物でさるところもガソリンスタンドも残ってた。だから直接津波受けていない人が、もう忘れ去っても全然困らない状態になってるから、余計話がややこしくなる。高田って買い物に行けば被災を思い出すもん。気仙沼の人はずっとエリアを選べば、被災した状況をもう見なくて暮らせるんだもん。でも、亡くなった人をいつまでも引きずっていられない、生きてる人間が生きて行かないといけないんだっていうのを高田の人間が言うのと気仙沼の人間が言うのは、意味合いが思いっきり変わるわけさ。被災した人間が復活しなくても、残った人間が困らないんだもん。

SNSは問題も発生するけど、リターンもでかい

陸前高田は、一番人数やられて、さらに上空からの映像とか最初の頃に消防団が撮った津波に追っつけられる映像がね、一番最初に世界中に流れたときに陸前高田っていう言葉がものすごい有名になった。そこに追い打ちかけるように一本松でしょ。陸前高田への支援ってのは他の市町村に比べてものすごい比率で入った。そのおかげで、とりあえず生きてくには困らないくらいへの改善っていうのは早かったわけさ。だから、もう物資や炊き出しっていう時期じゃない。今は新しいコミュニケーションをつくっていくための交流とかっていう話になるけど、それはあくまで陸前高田の場合であって、地域によつては、それは言えないだろうなと推測するしかない。もうニュースに取り上げられることもないでしょ。変化がなければ、ニュースに出ないんだもん。陸前高田は情報発信してる。SNS、ツイッターやフェイスブックを使うと問題も発生するんだけど、やっぱりリターンでかいんだよね。もしツイッターとかがないと大変だと思うね。やっぱり忘れられるのは怖い。



自分の稼いだもんは自分のものだと思いたい、だから復興が遅い

今になって阪神淡路震災、東日本大震災、中越って地震の復興の比較つてのがどんどんされてるわけさ。東日本大震災は遅い。決まるのも遅いし、進むのも遅い。最近になってわかってきたのが、阪神淡路震災の復興の投資金って半分以上が民間企業なのさ。ある程度の利益を見込める可能性がある。東日本はそうはいかねえもんなあ。何件かやってるんだけど、田舎に行くほどファンドって嫌われるんだよ。なんでかって言ったら自分の稼いだもんは自分のものだと思いたい。でもファンドって初期投資する金がないからファンドで金を集めて、集まった金で一気に規模でかくやって、でも利益を投資家に還元するっていう。自分は金がなくてやりていことができない。投資家はリスクはあるけど、この人の考えに賛同してお金を出したら、現金と満足感が返ってくる。それがファン

ドなんだけど、田舎に行けば行くほど、つくった大根は俺のものだと、つくった牡蠣は俺のものだつていう考え方が強くて、投資というものの認識がないんだよね。そんなのもあって補助金を断った漁協とか市町も結構あるんだよね。補助金をもらうのは良いけど、獲った牡蠣は出したくない。そんなおいしい話なんて、そうそうないんだよね。それを受け入れられないのが田舎なんで復興が遅い。

ふざけて写真撮った観光客をぶん殴りたくなつたな

一年目は、観光客がふざけて写真撮つててぶん殴りたくなつたな。お前の足元、家あつたんだぞつて。人亡くなつてるかもしれないんだぞつて。桜植えながら思つたのが、一本一本の桜が墓が墓に供えてる菊のような気がして。ただ同じ場を見ても感じることは人それぞれだからしょうがねんだろうな。Vサイン出して写真撮るようなやつ来んなんて言つて、陸前高田の産業つて成り立つの

か。観光地って多かれ少なかれ、そういう人間を呼んで金落してもらってなんぼじゃん。観光地側が人を選別できるのってほぼないと思う。

とつても悔しくて、次の世代にはそれを繰り返させたくない

桜ライン<sup>311</sup>の話の言いだしっぺは、桜の木をどこかに植えたって言ったのが陸前高田市の青年団の会長である橋詰琢見で、それを相談受けたのが俺。それで根本にあんのが、陸前高田市長・戸羽太さんの書いた本に、いつか被災地に癒しとなる桜を植えたっていう言葉を讀んだことだね。で、青年団として桜を植える事業をやりたいと。

こういう事態に、若いのが集まる場所がないってのは絶対問題だから。若いのが意見出せるためには、集まる場所なきやいけないから、うちの集会所使ってるつつて使わせてたのさ。そこで俺が相談受けて、青年団と言えども人住むところも決まんないに、桜の公園じゃな

いよねって言うて。でもどつかに植えようねって言った。じゃあどうするってなつて、「これより先に家を建てるな」っていう石碑もあったし、もともと今回の津波で警告はあったと。一〇〇〇年前の地層には今回と同じくらいの高さの津波来た地層が残ってる。もう二〇年も前から三〇年以内に宮城県沖を震源とする地震が来るってこだけ警告受けてたのに、それが全然役に立たなかった。それがとつても悔しくて、なんとかしたい。次の世代にはそれを繰り返させたくないって俺が思つてて。じゃあ桜で、目に見える形で次の世代につないだらどうだって言い出した。

桜ってきれいでしょ。きれいなんだけど、実際に見に来たら、誰もにつこりとできないんだよな。桜はきれいなんだけど、悲しい桜なんだろうな。でも実際に植えてみるとさ、一本一本がここまで来たんだよなつて思う。この悔しさを繰り返してほしくない。

桜ライン<sup>311</sup>ってイメージがすごくきれいだからこそ、普通のNPOよりきれいなきゃいけない

俺と橋詰で動き出して、橋詰が青年団のメンバーを巻き込むと。で、俺が青年団全体を見てて、青年団には情報発信力がまだまだだし、弱いところがあった。あと、会計に対してあまりにアバウトすぎた。正直ほんとにものすごい金額が動き出すだろうなって思ってた。青年団に扱える金額じゃない。数百万、へたすりゃ千万っていう話になる。青年団に透明性を担保した会計ができるかって考えた場合に非常に怖くて、NPOにその当時なるうって考えはなかったけど、NPOに準じたくらいの会計をちゃんとして、情報公開をちゃんとするのが必要だと思っただ。桜ライン<sup>311</sup>ってイメージがすごくきれいだからこそ、やるのが普通のNPOよりきれいなきゃいけないと。だから会計は独立させて専門家をお願いしたい。でも会計士を本格的に頼んだら年間何十万ってなっちゃう

から、それをサポートしてくれる支援団体が知り合いにいたんで頼んだ。基本は青年団と会計と情報発信担当っていう位置付けやったんだけど、思ったより青年団が動かないし、橋詰さんは忙しいのもあったし、家族の介護もあったから次の代表に代わった。

やらないで後悔するんだったら、やって後悔しとけば良かった慰霊という意味は正直最初はなかった。後世に同じ過ちを繰り返してほしくないというのでスタートしたんだけど、やっぱり植えてみて頭に浮かぶのは亡くなった友だちなんだよ。まだ見ぬ子孫ではなくて、植えるごとに亡くなった友だちの顔が浮かんでくる。だから一回目の植樹では、俺かなり泣いたよ。思い出しては泣き、思い出しては泣き。でも子どもの前では泣かないようにして、一人になると泣いてた。

だって悔しいもん、地震あったらこうやって誰と誰を避難さしてって言った消防団の仲間が、人を誘導する

ために流されたなんてさ、そんなバカな話ないよね。ましてや浜にいと、いつかこの防潮堤越えるような津波来る可能性があるよねって言ってたのに、それを発信できずにいた。今でもそうなんだけど、震災からずっと俺、自分に腹立ってる。

まあ周りにも文句言うことあるけど、なんでこんなところに市役所建てたんだって思ったことあったけど、震災前に自分にできることあったよね、気づいてたことあったよねって。俺それ言ってるじゃないよね、俺ってバカだよなって。もしかすつとあの友だち殺したの俺かもしんない。やんないで後悔するんだったら、やって後悔しとけば良かった。だから、失ってから後悔するよりも、起きるかもしれない1%のことに努力を惜しまない。それが今の活動に繋がってる。

タイトル

関西大学商学部 長谷川ゼミナール 二〇一四年度聞き書き作品  
起きるかもしれない1%のことに努力を惜しまない

話し手

佐藤 一男さん

聞き手

大槻 淑子、古賀 真知子

編集者

小井手 祐子

発行年月日

二〇一七年三月一三日 発行

発行者

関西大学商学部 長谷川研究室

〒五六四・八六八〇

大阪府吹田市山手町三二三三三五

e-mail: shin@kansai-u.ac.jp

URL: <http://www2.itc.kansai-u.ac.jp/shin/>

: <https://www.facebook.com/kandai.hasegawa>

©2017